

-communion with nature-

~自然と友に生きる~



- インタビュー記事
- 富士ぶどう園 諏訪部さん
- 晴木屋 小泉さん
- まちかど探検
- こだわり寺内店
- 地元のイベント情報
- 垂樹ちゃんの今夜のおかずレシピ

Vol 1
2010年秋号

花鳥風月

創刊号!!

有機栽培とは…
生き方そのもの。
人間は自然の一部であり、
自然と共に生きることが本来の人のあり方



会長 諏訪部明が有機農業について語る。
『安全な食を考える会』

諏訪部 明プロフィール

- ・愛川町会議員：7期
- ・高峰農協：元専務理事
- ・農民組合（愛川町）：元会長
- ・愛川町農業委員会：元会長
- ・農民組合神奈川県連合会（県）：元代表、現在顧問
- ・農民連（全国）：立ち上げメンバー
- ・土作り研究会：現会長
- ・神奈川県農畜産物供給センター：設立当時の役員
- ・安全な食を考える会…現会長

愛川町でブドウ栽培して58年、有機栽培に移行して28年 ブドウの栽培面積（60アール）に8種類のブドウの栽培を、現在では息子さんに引き継いで続けています。現在88歳。愛川町での有機農業の先駆者で約35年前に生産者と消費者の距離を縮める生産直売の店「神奈川県農畜産物供給センター」を立ち上げました。加えて農家の生活確立のため農民組合立ち上げや消費者の側から安全な食の認識を広げるために「安全な食を考える会」も設立されました。

そのような諏訪部さんのブドウの木には有機栽培への歴史が生きづいています。実際に諏訪部さんの有機栽培したブドウは化学肥料栽培の時と比べると木は丈夫になり、実はぶどうの風味あふれる濃くて甘いものに変化したそうです。そんなブドウの味に象徴されるような諏訪部さんの濃い道のりについて取材してきました。



諏訪部さんを有機農業へと導いた道のり。

諏訪部さんを有機農業へと導いた道のりは農家の生活を守る活動の日々でもあります。

『戦争に翻弄されながらも戦場から生き延びた命。今後は自分が納得した人生にし、暮らし良い世の中になりたい』という思いを胸に、戦後諏訪部さんは愛川町で就農していました。その思いが後々『本物作り』という意味で有機農業へと諏訪部さんに向わせることとなります。

およそ50年前のことです、高峰（現愛川町）の農家全体に衝撃が走りました。農協が経営破たんし、貯金不払いを強行したのです。それにより、諏訪部さんを含め高峰の農家に混乱が起きました。現状を打破するために、諏訪部さん（当時37歳）が推薦され、農協の専務に就任し農協復興に尽力しました。このような状況の中で、農家の生活について不安定さを感じ、農家の在り方自体に変革の必要性を感じました。農業と農家の経営を守るためには農家の自立が必要だと思い立ったのです。そこで農家が自主的につくった団体である農民組合を愛川町で立ち上げました。ひき続き神奈川県下の農民組合県連を立ち上げ、全国の農民連の立ち上げにも力を注ぎました。

諏訪部さんが農業をしはじめた当初は化学肥料や農薬を利用してブドウ栽培されていました。農家として自営しながら農協や農業委員会の活動の中で、戦後に誓った『今後は自分が納得した人生にし、農民と消費者の健康を守る』との思いから自分が使っている化学肥料のこと、農薬のこと、有機栽培のことを自ら調べ実験しました。そして知れば知るほど食品の安全面でも使用する側の農家の健康面でも農薬の危険性を感じるようになりました。『後世自分の息子のためにも安全で本物をつくる農家を継承したい』という思いから、今から28年前に日本でも数少ないブドウの有機栽培農家になったのです。



諏訪部さんにとって、有機農業とは？

諏訪部さんにとって有機栽培とは…生き方そのもの。人間は自然の一部であり、自然と共に生きることが本来の人のあり方。

諏訪部さんの有機農法とは？？

環境調和の栽培法。

例えば害虫を食べてくれる天敵を呼ぶために、天敵が好む雑草をあえてはやす。そのことによって天敵が集まり害虫を減らすことが出来る。そういった環境を作り出すことで健全に植物を育てることが出来ると言われます。有機農法の資材として天敵を販売しているところがありますが、外から意図的に天敵を入れるより

、天敵の好む環境をつくって天敵を自然発生させた方が天敵は定着しやすいそうです。環境を知り、植物を知り、その調和を知る。それには農家としてのものを見る目を養うことが必要で、我慢と経験が必要なのです。

諏訪部さんにとって本物とは？？

その植物が本来の特徴を持って生きているもの。それは植物の姿であり味についても言える事です。(例えば、ピーマンの苦味や人参の香り)その植物の特性を知り、それが持つ特徴を生き生きと発揮できる環境を作り出すこと。それが本物づくりであるとおっしゃいます。



諏訪部さんの思う有機栽培の必要性とは？？

堆肥等の有機物を土に帰さないで土の劣化が進み収量が減ること。土の極端な劣化により食糧問題にも発展しかねない問題です。現在の有機物投入量200kg/反。1960年代は1トン/反、投入していたそうです。これだけ投入量が減ると土の劣化が進みます。

なぜ有機肥料が必要なのか、地上の有機物(植物)が分解され土になりそこからまた地上の有機物(植物)になる、これが自然の摂理。有機物の養分からしか有機物はできないのです。有機肥料は元々地上にある有機物なので有機物(植物)に必要な様々なミネラルやN・P・K(窒素・リン・カリウム)をバランスよく含みます。有機物は微生物の餌になりながら無機物に分解します。そしてその無機物が有機物の餌になり有機物ができる。こういった有機物の循環が必要なのです。対して化学肥料を使用した畑は有機物にとって必要な栄養素が不

